

2020年7月26日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 49：2～21

ルカによる福音書 9：21～27

「わたしに従いなさい」

<厳しい教え？>

イエスさまは弟子たちに言われました。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

イエスさまの弟子として歩むには、自分を捨てること。日々、自分の十字架を背負うこと。なんだか滅私奉公をせよと言われていたような、厳しい修行に耐えなければならないような、そんな印象を受けるお言葉です。ちょっとわたしには荷が重い。出来るかどうか、分かりません…そう答えたくなるお言葉です。

いったい、イエスさまは、弟子たちに、わたしたちに、何を求めておられるのでしょうか。イエスさまに従うとは、どういうことなのでしょう。

<戒められた>

まず、イエスさまがこのことを語られたのが、どういう場面だったかを確認したいと思います。それは、先週の聖書箇所、イエスさまがペトロに「あなたがたはわたしを何者と言うのか」と問いかけられ、ペトロが「神からのメシアです。」「神のキリスト、神に遣わされた救い主です。」とお答えした、そのやり取りの続きになります。

イエスさまが、神に遣わされた方であり、神の救いのご計画を実現するために来られた救い主であること。ペトロはこのことを、イエスさまの祈りと導きの中で、はっきりと告白しました。

ペトロをはじめとする十二人の弟子たちは、すでにずっとイエスさまに従ってきています。神の国の教えを繰り返し聞き、イエスさまが神の權威によって行われる奇跡を目撃し、力を与えられて、イエスさまの教えを宣べ伝える「使徒」の役目も果たしました。そして、この方が何者であるか。神の御業を実現する神の子、メシアである。救い主である。こうはっきりと告白しました。もう充分、十二人はイエスさまの弟子として従っているように思えます。

しかし、今日の聖書の 21 節では、ペトロが「神からのメシアです」と告白した後すぐに、イエスさまは弟子たちを戒められ、このことをだれにも話さないように命じられた、とあります。告白して、よく言えました、OK、ではなかった。今、あなたが告白したことを、だれにも話さないように、と命じられたのです。まず、それは、なぜなのでしょう。

<どういうメシアか>

イエスさまは、ペトロが「神からのメシアです。神のキリスト、神に遣わされた救い主です」と答えた後、その「救い主」は、どのようにして救いの御業を成し遂げるのかを語られました。それが 22 節に語られていることです。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」

「人の子」というのは、イエスさまがご自分を指して使われる言葉です。イエスさまは、ご自分が救い主として、必ず多くの苦しみを受け、ユダヤ人の指導者たちから排斥され殺されなければならない。そして、三日目に復活させられなければならない、と言われたのです。それが、救い主の歩みである。それが、神さまのご意志、ご計画である、と語られたのです。

しかし、当時の人々が思い描いていたメシア、救い主は、全く違うイメージでした。メシアというのは、旧約聖書において神に選ばれ、油を注がれて、特別な役割を担う者のことです。ユダヤの人々は、散らされた民を集め、滅ぼされたイスラエルの王国を立て直してくれる、新しい王。自分たちを抑圧する諸外国を打ち倒す、神に選ばれた強い王。そんなメシアを待ち望んでいました。それは絶体絶命の大ピンチをかつこよく救ってくれるヒーローであり、圧倒的な力で敵や悪をなぎ倒し、世界一素晴らしい王国を築いてくれる、カリスマの王様のような存在です。

ペトロや弟子たちも、イエスさまが「神のメシア」だと告白したとき、自分が従っている方が、イスラエルの民が待ち望み、神が約束された「救い主」だとはっきり示されたとき、そのようなイメージを思い浮かべ、高ぶりを覚えたかも知れません。この方が民を救い出す。この方が王となられる。わたしたちは、その弟子だ。それを誇らしく思ったかも知れません。

わたしたちも、もし誰かに弟子として従っていくならば、師匠となる方は人々が憧れるような人であって欲しいし、自分もその方の弟子であることを誇りに思い、自慢に思い、その方を心から慕って、何があっても付いて行きます！と思える人がいいのではないのでしょうか。

でも、イエスさまは、ご自分はそうではない、と仰るのです。あなたが思い描くメシアではない。人々の憧れの対象となり、尊敬され、愛されるメシアではない、と仰るのです。

イエスさまは、ここで、まことのメシアが、ご自分がどうなるかを明らかにされます。わたしは人々に蔑まれ、侮辱され、暴力を振るわれ、殺される。ボロボロにされて捨てられる。だから、わたしの弟子であることを、あなたたちは、誇りに思うどころか、恥ずかしく思うだろう。弟子であることを隠したくなり、関わりを捨てたいと思うだろう。

イエスさまは、今日の前にいる弟子たちの心を、そして、これから弟子たちがイエスさまの受難によって体験するであろうことをご存知であり、それを深く見つめておられます。

だからこそ、イエスさまはこの時、弟子たちに「このことをだれにも話さないように」命じられました。まだだれも、イエスさまがどのようなメシアであるかを、本当には理解していないからです。

<わたしに従いなさい>

しかし、イエスさまは、このようなメシアでなければなりません。それは、この方がわたしたちの罪を、そして滅びの死を、代わりに担って下さり、そのことによって救って下さるからです。

わたしたちは神さまに創造され、愛され、生かされているのに、このまことの神を神とせず、神さまから離れ、神さまを無視し、神さまとの関係を破壊して生きています。それが、神さまの裁きを受けるべき罪であり、神さまが怒っておられることであり、まさに滅びに至ることなのです。

でも、神さまはわたしたちを裁き、怒りを下し、滅ぼすことをなさらなかった。わたしたちの罪を赦し、関係を回復し、共に歩みたいと願って下さった。だから、ご自分の御子であるイエスさまを遣わして下さったのです。そして、わたしたちの罪を、死を、イエスさまが代わりに引き受けて下さることによって、父なる神さまはわたしたちの罪を赦し、ご自分のもとに立ち帰らせ、新しい命を得させようとして下さったのです。父なる神さまは、愛する独り子を、わたしたちの罪の赦しのために遣わして下さるほどに、わたしたちが滅びないで、命を得ること、神さまと共に生きる者になることを、望んで下さったのです。

ですから、このイエスさまにしか、わたしたちの救いはありません。このイエスさまにしか、神に至る道はありません。このイエスさまによってしか、わたしたちは罪の赦しを得られないし、このイエスさまによってしか、神と共に生きる命を得ることは出来ないのです。

そしてイエスさまは、メシアとしての、ご自分の復活についても語って下さいました。

「三日目に復活することになっている」とは、神さまによって、イエスさまが死者の中から復活させられる、ということです。イエスさまの復活は、わたしたちが罪による滅びの死から救い出され、神と共に生きる永遠の命、終わりの日に復活が与えられることの、確かな約束であり、保証です。

この復活の約束があるからこそ。地上の人生を超えた、地上の死を超えた、神さまの命の約束があるからこそ。わたしたちは地上のものを求めることなく、将来、神さまから与えられるものを待ち望みながら、今与えられている日々を大切に、希望を失うことなく歩むことが出来るのです。

ですから、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

救いは、救い主であるイエスさまにのみあります。「自分を捨てなさい」とは、自分の思いも、存在も、命そのものも、イエスさまにすべて委ねなさい、ということです。

自分を捨てることは、自暴自棄になったり、世捨て人みたいになったり、感情を捨ててロボットみたいになることではありません。自分でしがみつき、頼りにし、正しいと信じている自分を捨てることです。そしてわたしたちは、自分に従うことをやめ、自分を捨ててイエスさまに従うことによってこそ、本当の自分、神さまに造られ、愛され、生かされている本来の自分を見出すことが出来るのです。

そして、イエスさまの後に従っていくならば、わたしたちはイエスさまの苦しみに、共に与ることになります。イエスさまは、ご自分に従う者は迫害に遭うと、はっきり仰っています。イエスさまを受け入れない人々は、自分の思い通りにならないものを、期待とは違うものを、邪魔に思い、排除しようとするからです。ですから、イエスさまに従う者は、イエスさまの弟子であるために、信仰のゆえに、世において戦いがあるかも知れません。日々、苦しみや困難を覚えることがあるかも知れません。それが、「日々、自分の十字架を背負う」ということなのです。

24 節には、「自分の命を救いたいと思う者は、それを失う。」とあります。自分の命を救いたいとは、自分で自分を救おうとすることです。もしわたしたちが、自分で自分を救おうとして、イエスさまの救いを求めないなら、わたしたちは命を失うことになってしまいます。

しかし、イエスさまは、「わたしのために命を失う者は、それを救うのである」と言われます。イエスさまのために生き、イエスさまのために死ぬのなら、それはつまり、イエスさまにわたしのすべてを預けてしまうならば、救い主であるイエスさまが、わたしを救って下さるのです。

だからイエスさまは言われます。「たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。」地上のものは何ひとつ、わたしたちを救うことは出来ません。たとえ全世界を引き換えにしても、救いを、永遠の命を得ることは出来ないのです。でも逆に、わたしたちは、全世界を失っても、イエスさまさえおられるなら、イエスさまの命に与ることが出来るのです。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

「わたしに従いなさい」とのご命令は、イエスさまの十字架と復活の救いの、確かな約束の中で命じられたことです。わたしがあなたの救い主なのだから、わたしが、神に遣わされたまことのメシアなのだから、わたしが罪を赦し、わたしが永遠の命と復活の約束を与えるのだから、あなたは、このわたしに従いなさい。そう言って下さるのです。

#### <神の国>

でもまた、聖書は正直に語っています。イエスさまに従いなさいと命じられた弟子たちが、この後、結局は自分の思いに従ってしまったこと。ユダがイエスさまを売り渡すこと。ペトロが十字架に向かうイエスさまの仲間だと思われたくなくて、三度知らないと言って、関係を否定してしまうこと。他の弟子たちも、全員イエスさまを見捨てて逃げ去ってしまうこと。

弟子たちは、イエスさまの受難の時、イエスさまのために自分を捨てられませんでした。自分の十字架を負うことができませんでした。イエスさまのことを恥じ、自分たちもまたイエスさまを排斥してしまいました。弟子たちは自分のあまりの弱さに、自分が捕らわれてい

る罪の現実に、打ちのめされたのではないのでしょうか。

しかしイエスさまは、お命じになった時から、弟子たちの弱さも、裏切りも、無理解もよくご存知だったに違いありません。イエスさまは、その弟子たちにどんな思いで、どんな憐れみの眼差しで、どんな深い祈りをもって、「わたしに従いなさい」と語られたのでしょうか。そしてイエスさまは、そんな弟子たちの罪も、弱さも、嘆きも、すべてご自分の十字架に引き受け、罪を赦し、復活して再び出会い、彼らを新たに立ち上がらせて下さったのです。彼らをまた、ご自分に従わせて下さったのです。

イエスさまは、確かにペトロに答えさせました。御自分が何者かを告白させました。「あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」

「神からのメシアです。」「神のキリスト。神の救いの御業を成し遂げる、救い主です。」

イエスさまは、救い主です。イエスさまは、ご自分が救い主である、というこの確かさによって、この真実によって、弟子たちを立たせ、従わせて下さるのです。

ですから弟子たちは、わたしたちは、強い意志や、頑張りや、勇気によって、イエスさまに従い抜けと言われているのではありません。ただ救い主であるイエスさまに信頼すること。そうすれば、救い主であるイエスさまが、祈り、導き、わたしたちを弟子として立たせ、歩ませて下さるのです。「自分を捨てなさい。あなたの弱さを、あなたの罪を、全てをわたしに委ねなさい。そして、わたしに従いなさい。」そう言って下さるのです。

イエスさまは、ご自分の十字架による罪の赦しと、復活の恵みの中で、祈りをもってわたしたちを招いて下さり、わたしたちに命じて下さり、イエスさまと共に歩む道こそ、最も幸いな道であると教えて下さいます。

わたしたちは、自分の力に頼るなら、イエスさまにまともに従うことは出来ません。イエスさまは、あなたの命を、あなた自身を、このわたしに預けなさいと言われる。あなたはわたしのものだと言われる。このイエスさまに、自分を捨てて頼っていくならば、そして、イエスさまの苦しみの御跡が、わたしの救いのためであると知るならば、わたしたちは自分を捨てて、日々自分の十字架を負って、イエスさまに従っていくことが出来るのです。

そして、この方の救いの恵み、この方が救い主であることは、イエスさまに従って歩む中でこそ、ますます明らかにされ、ますます知らされていくのです。

そうして、イエスさまと共に生きている今この時から、わたしたちは永遠の神の国、神の恵みのご支配の中を、歩み始めることが出来るのです。

## 【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、わたしたちの罪に対する怒りを、裁きを、愛する御子であるイエスさまに下されました。イエスさまを救い主として遣わして下さり、わたしたちが神さまに立ち帰って、神さまの恵みの内に生きる道を拓いて下さいました。心から感謝いたします。

このイエスさまにしか、あなたが遣わして下さったメシアにしか、わたしたちが救われる道はありません。どうか、わたしたちがこの方を「神のキリスト、救い主」と告白し、ただこの方にのみ信頼し、従って、歩むことが出来るようにして下さい。

わたしたちの救い主、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン